特別史跡 大野城跡

大石垣、八ツ並地区建物跡

史跡環境整備に伴なう発掘調査概報

1976

福岡県教育委員会

発刊のことば

この報告書は、福岡県教育委員会が、昭和50年度に国庫補助を受けて行った、特別史跡大野城跡における「大石垣」「八ツ並」での史跡環境整備事業にともなう事前発掘調査の記録であります。

これまで大野城関係では冊子としての発掘調査報告がなく、この報告書も満足すべきものではありませんが大野城ひいては文化財に対するご理解を少しでも深めていただければさいわいです。

調査に際してご援助ご協力をいただいた関係各位に心から感謝いたしまして発刊のごあいさつといたします。

福岡県教育委員会教育長

森　田　　實

目　　次

頁

Ⅰ　大野城の概要と今回の調査経過……1

Ⅱ　大石垣の調査……5

Ⅲ　八ツ並地区の調査……11

　1　遺　　構……11

　2　遺　　物……24

Ⅳ　結　　び……24

例　　言

1　本報告は、特別史跡大野城跡における「大石垣」「八ツ並（やつなみ）」での昭和50年度の発掘調査の記録である。

2　本調査は福岡県教育委員会が、昭和50年度に国庫補助事業として行った史跡環境整備に先立って実施したものである。

3　本調査の関係者は下記の通りである。

調査主体者　福岡県教育庁管理部文化課

藤井　功（文化課長）　　二村能史（文化係長）

野上　保（課長補佐・現九州歴史資料館副館長）　　芳沢　要（主　査）

　　滝　竜二（主　事）

川崎隆夫（課長補佐）　　磯村幸男（技　師）

調査指導者

沢村　仁（九州芸術工科大学教授）

調査担当者（九州歴史資料館）

横田義章（技　師）　　高橋　章（技　師）

高倉洋彰（技　師）　　石丸　洋（技　師）

調査補助員

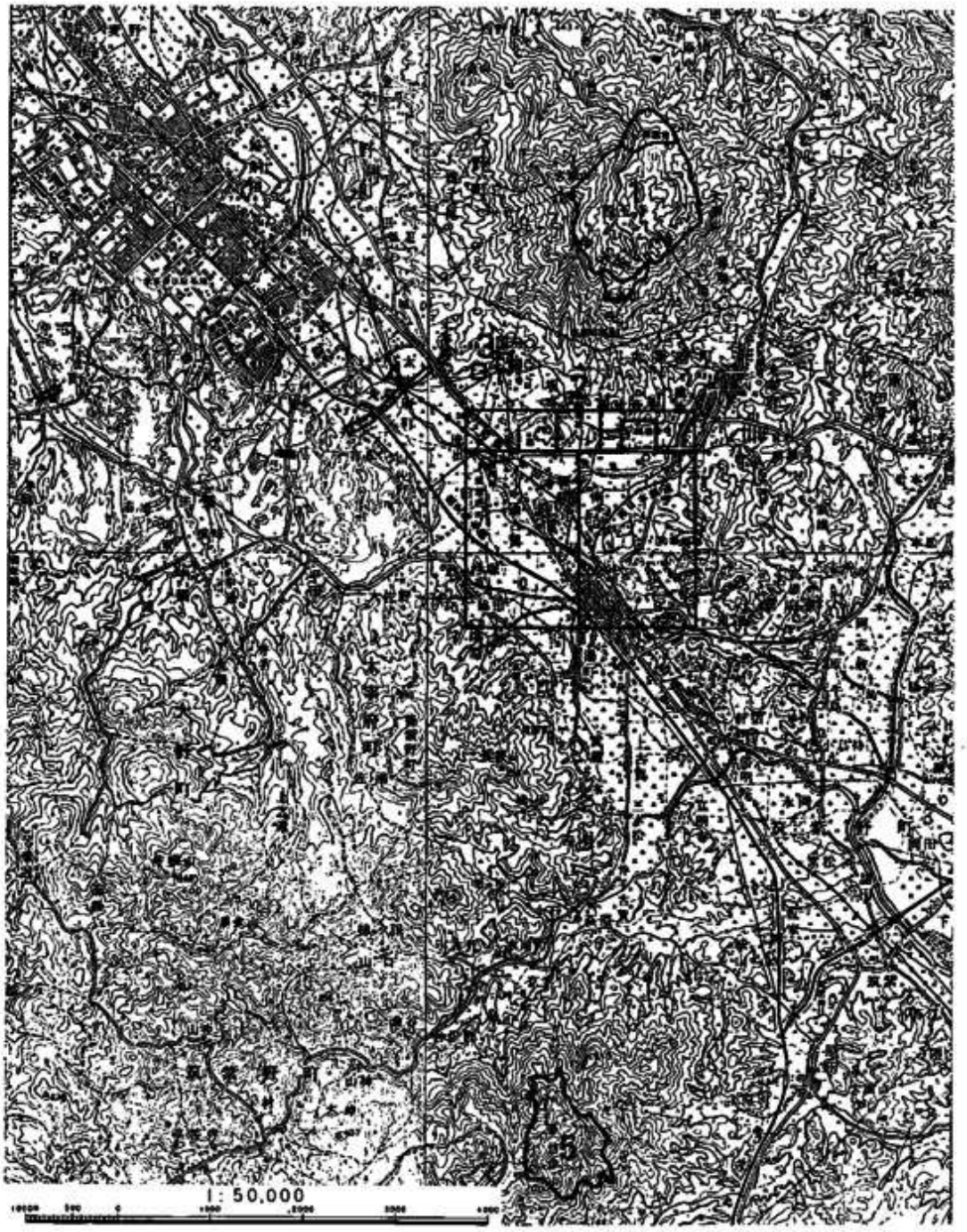
真玉秀樹（九州大学研究生）

調査協力者

福岡県林務部緑地推進課　　福岡県労働部失業対策事業課

宇美町教育委員会　　太宰府町教育委員会

Ⅰ　大野城の概要と今回の発掘調査



第1図　太宰府周辺地形図　1.大野城　2.大宰府　3.筑前国分寺・国分尼寺
4.水　城　5.基肄城

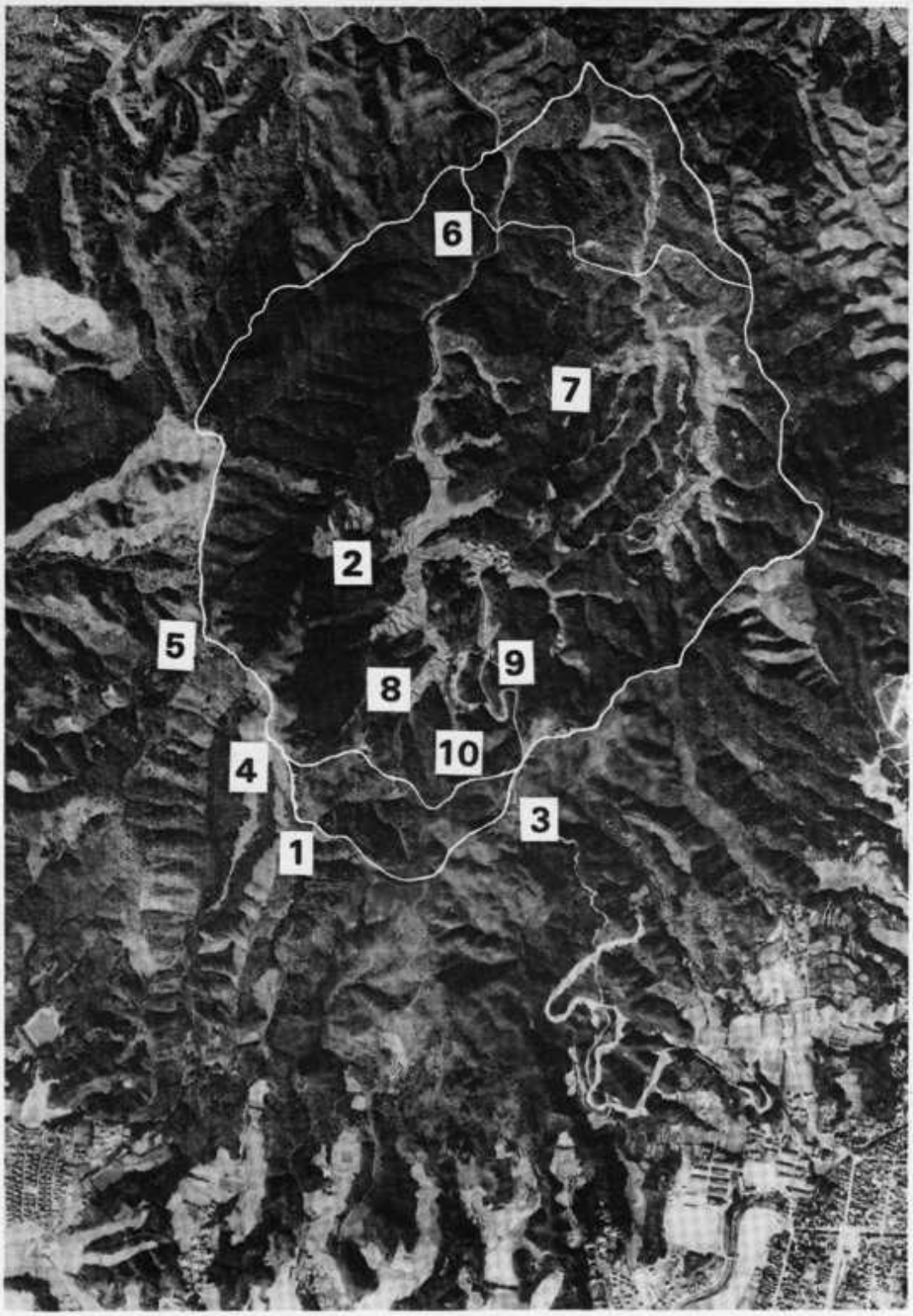
現在特別史跡となっている「大野城跡」は、福岡県筑紫郡太宰府町、粕屋郡宇美町、大野城市の三市町がその境界を接する四王寺山塊に所在する。標高は最高所で 410*m*である。（第1図）

663年、朝鮮半島の白村江において百済と連合した日本軍が新羅・唐連合軍に敗れた後665年（天智天皇4年）、海外からの進攻に備える防衛施設として築かれたもので「朝鮮式山城」と通称される周囲5*km*余の広大な規模の山城である。日本書紀には天智天皇が前年（664年）に「水城」を築いたのを初めとしてその後4年間に西北九州方面を中心に8城を構築した記録が残る。大野城はこれらのうちで、水城・基肄城と共に大宰府防備を意図しての築城であったと考えられる。

この種の山城は山塊の山頂部、稜線部を土塁・石塁等でつないで外郭とし、所所に城門を、また河谷部の石塁には水門を設け、城内には盆地・河谷等を取り込み倉庫・井戸等の施設を持っているのが特徴的である。これと同様な外郭線を切石列で構成する「神籠石」と通称される城との関連はまだ説が固まっていない。

大野城の外郭について　大野城の外郭は土塁と谷部での石塁とにより構成され、特に南方の

第2図　大　野　城　全　景（南西から）



第3図 1.大石垣　2.八ッ並地区建物群　3.太宰府口城門　4.坂本口城門　5.水城口城門　6.百間石垣城門　7.主城原地区建物群　8.猫坂地区建物群　9.尾花地区建物群　10.鏡ケ池地区建物群

太宰府側と北方だけは二重外郭としている。この間に南方3カ所、北方1カ所の城門があったことが門礎の発見により明らかにされている。

石塁は5カ所にあり、最大のものは北門部にある通称「百間石垣」で全長約 200m、最高部は7mを数える。土塁幅は6～7m程である。

大野城内の施設　城内には7カ所に建物跡が礎石群として分散しており、今回調査したものを加え約50棟が確認又は推定でき、これらのうち数棟を除いて他は総柱の倉庫と考えられる。井戸は3カ所発見されている。通常の住居としての建物、住居跡等の確認例はまだないが発掘調査が進展すればやがて明らかになろう。

大野城跡については『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』『大宰府都城の研究』等にうかがうことができるように大野城の全貌を探る重要な調査が古くから行われてきているが、細部について発掘調査も近年進行しつつありそれらの調査略報が若干みられる。(註)

調査経過　大石垣は昭和50年7月21日から同8月5日まで石塁崩壊部分を中心にした実測調査と、整備内容が崩壊石塁部分の旧状復原であったため従来「城門説」のあった石塁が彎曲する谷底部分及び石塁裏面（城内側）の一部について発掘調査を行った。その結果は後の項で述べるように城門は石塁崩壊部には存在せず、また谷水の流出口として特に水門は作らずいわゆる盲水門として石塁の下を自然排水していることが確認された。

八ツ並地区においては大石垣調査終了後、昭和50年8月6日から同10月6日まで発掘調査を行った。本年度の建物跡環境整備は当初「猫坂」地区に予定したものであったが、四王寺山における県民の森整備事業が八ツ並地区にも実施され、その遊歩道が建物跡辺に計画されたために八ツ並地区に変更した。

八ツ並地区ではこれまで5棟程の建物跡が知られていて、そのうち1棟は史跡指定を受けていた。しかし立地条件の良好な当地区にはこれらの外に建物の存在したことが推定された。そのため調査が広い範囲（対象総面積約15,000㎡）にわたっての建物跡分布調査の様相を呈するものとなり、制限された期間等の条件もあり発掘調査はごく小規模なトレンチを主体とすることを余儀なくされた。しかしながら建物の分布・規模については一部を除いておおまかではあるが全面的に知ることができた。

註　大野城関係文献（抄）

大野城全体にわたるもの、　島田寅次郎「大野城址」（『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第2輯 1926 ）、鏡山猛『大宰府都城の研究』1968

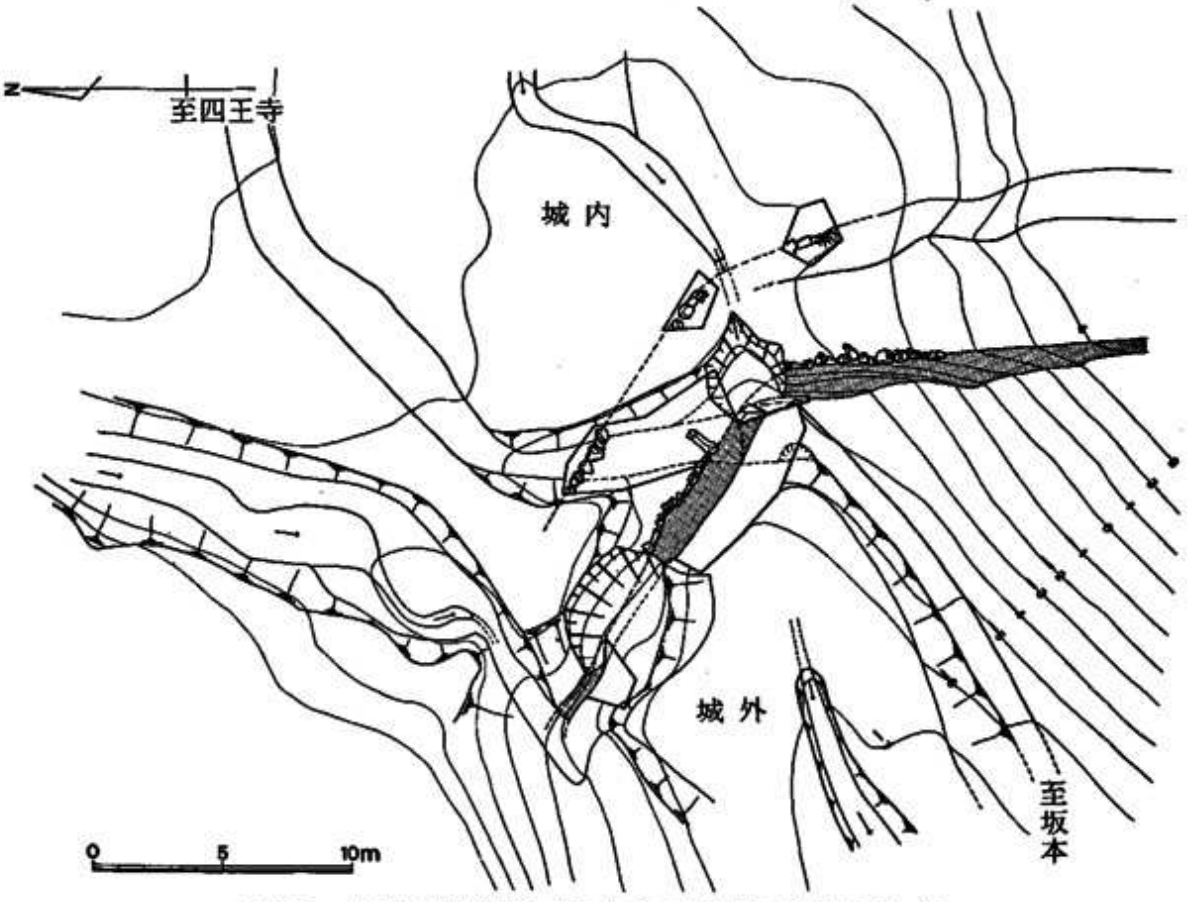
発掘調査報告、　「大野城跡発掘調査（増長天鏡ケ池地区）」（『九州歴史資料館年報、昭和48年度』）1974、「特別史跡 大野城跡百間石垣の調査」（『九州歴史資料館年報、昭和49年度』）1976

Ⅱ 大石垣の調査

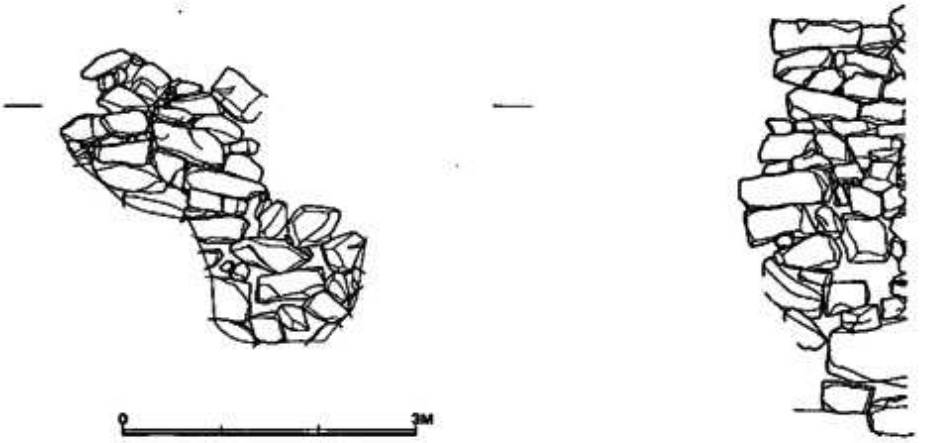
筑紫郡太宰府町大字坂本字口上谷(とうじようだに)所在の大石垣と通称される石塁遺構は、大野城にみられる5カ所の石塁中百間石垣に次ぐ規模をもつ。全長64mを計るが(註1)、さらに崩壊の跡があり筑前国続風土記にいう「石垣の高二三間、長さ七八十間」に近い規模も考えうる。石塁は谷を塞ぐように尾根から谷にかけてV字状に構築され、その最低部を坂本からの登山道によって切られている。一見して通路の両側では石垣線に食い違いがあり、城門構造に由来するものであろうと考えられている。(註2)

尾根から下方に向かう石塁は谷部でやや平坦となるが、その前面に著るしい土砂の堆積がみられる。調査はこの埋没部分について行ない、補足的に3カ所のトレンチを設けた。

石塁の前面では堆積した土砂を排除し、石垣の基底部の検出を試みた。石垣はその上部においては割合整然と規則性をもって積石がなされているのに対し、下部はまったく雑然としており（第5・8図）、本来の積石と崩壊石との区別に困難を感ずるほどであった。昭和49年度に

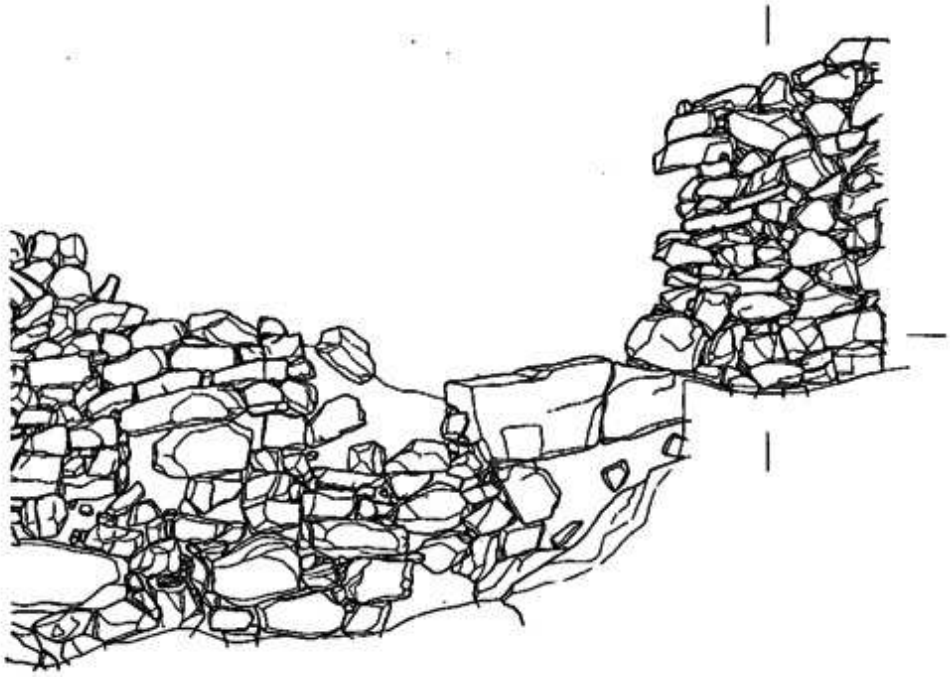


第4図　大石垣地形実測図（網目部分は石塁前面の斜面をあらわす）



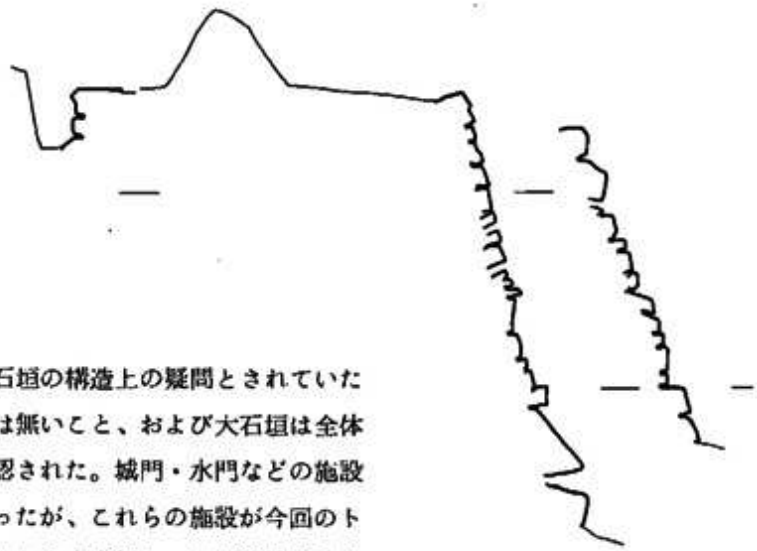
調査した百間石垣の基底部は岩盤を利用しつつ平坦に基礎的な石積みを行ない、その上に石塁を構築していた。しかしながら大石垣ではそのような構造の検出にはいたらず、積石の一部に岩盤の利用がみられる点や雑然とした下部の積石の状態から、まず谷間を乱石によって堰止め盲水門的に水流を通し、その上に石積みをして石塁を構築したと思わせるほどであった。結果的に水門が検出されなかったことや現実に二つの水流が石塁中に吸い込まれていることを考えれば、あながち意味のない想定ではあるまい。また排土の結果、石垣線はその下部において登山道の両側が連続していることが明らかとなった。したがって、石垣のこの部分に食い違いがあり、それが城門構造に関連するであろうというこれまでの見解を訂正することができた。石垣の高さは残存状態のもっとも良好な部分で約 4.5m を計る。石垣はほぼ水平に石積みされ、尾根に向かうにつれ斜方向となっている。(第５図)　このような積石の流れや尾根に向かう部分の残存状態からみて、この部分の石垣の高さは本来の高さをそれほど減じているとは思われない。

石垣の背面構造はこれまで明らかでないため３カ所にトレンチを設定し、その確認を行なった。その結果、各トレンチともに積石が検出され（第10・11図）、これによって大石垣が全体に石塁をなすことが確認された。(第４・７図)　石塁の前面とほぼ同レベルで後面の積石を検出した通路西側の所見によれば、石塁の上端幅は約４ m を計っており（第６図）、おそらく４



第5図　大石垣正面実測図

m前後の幅をなす石塁であったろうと思われる。石塁の内部はほとんど土砂を含んでおらず、石のみで構築されていたことが知られる(第9図)。石塁構造の確認によっても石垣線に食い違いの無いことが検証される。



第6図　同上断面図

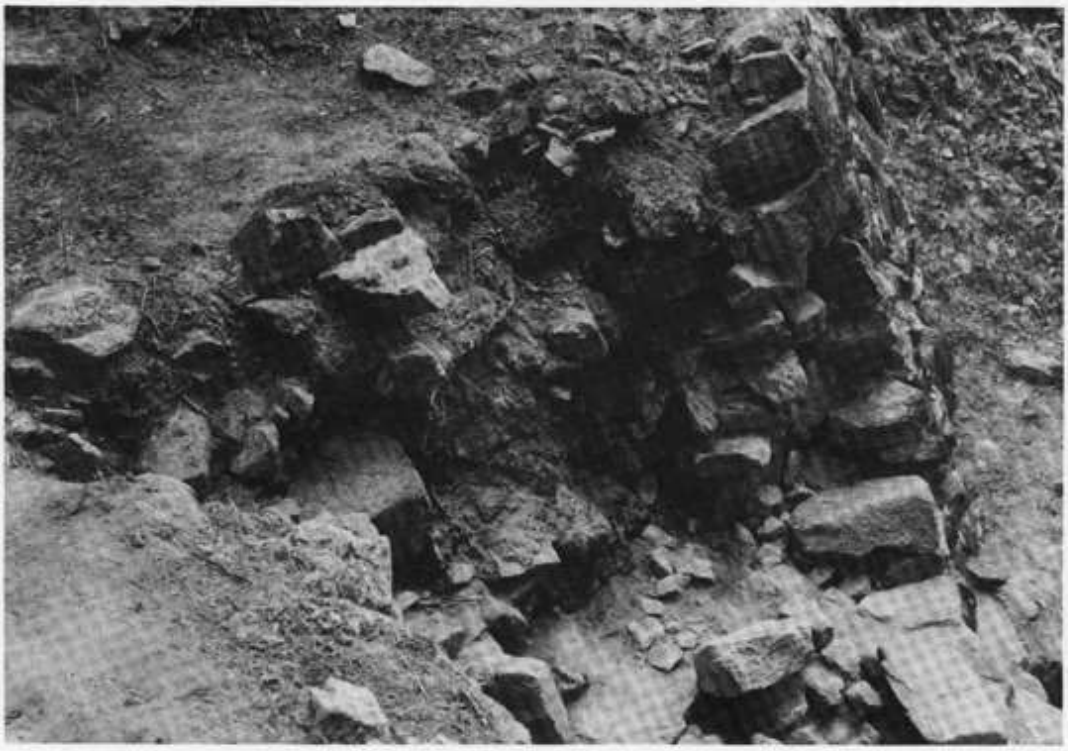
今回の調査によって、大石垣の構造上の疑問とされていた石垣線の食い違いが実際には無いこと、および大石垣は全体的に石塁であること、が確認された。城門・水門などの施設を確認することはできなかったが、これらの施設が今回のトレンチ外にあったと考えるよりも本来無かった可能性が強かろう。

なお、石塁に関連する遺物は出土しなかった。

註1・2　鏡山猛『大宰府都城の研究』1968

第 7 図 大　石　垣　近　景

第8図 大石垣の積石状態



第9図 大石垣の断面

第 10 図　大石垣の前面（左）と後面（右）

第 11 図　背　面　の　積　石

Ⅲ 八ッ並地区の調査

八ッ並は粕屋郡宇美町大字四王寺にあり、大野城中央部のやや西方である。一般に八ッ並地区建物というのはかならずしも「字八ッ並」というのでなく八ッ並に隣接する二つの字地のものも含んでいる。

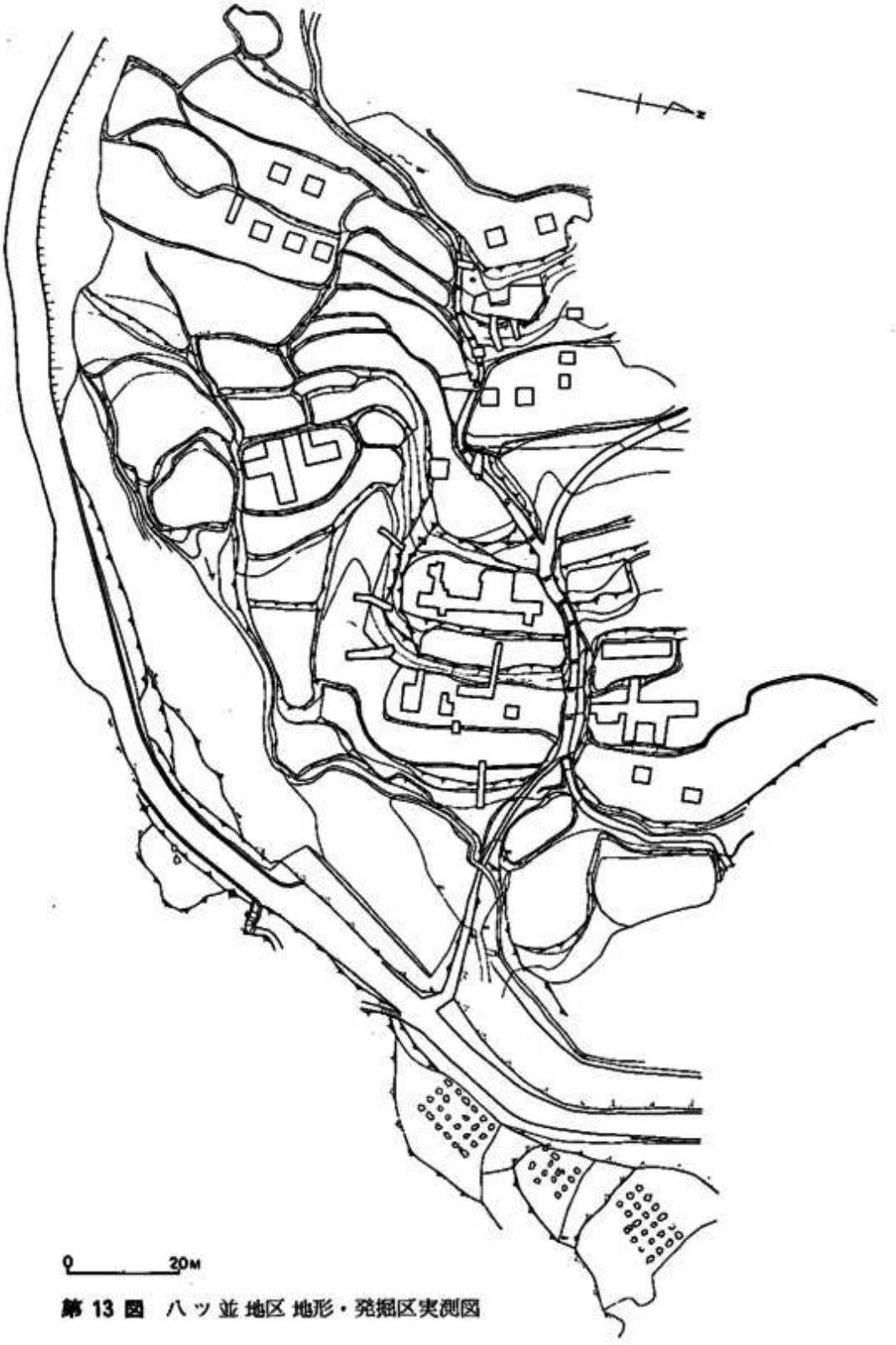
(1) 遺　　構

この地区における建物跡はこれまで5棟分が確認または推定されていた（第14図建物番号1. 3. 5. 8. 15）が今回調査により建物10棟分を追加確認するに至った。（第14図）

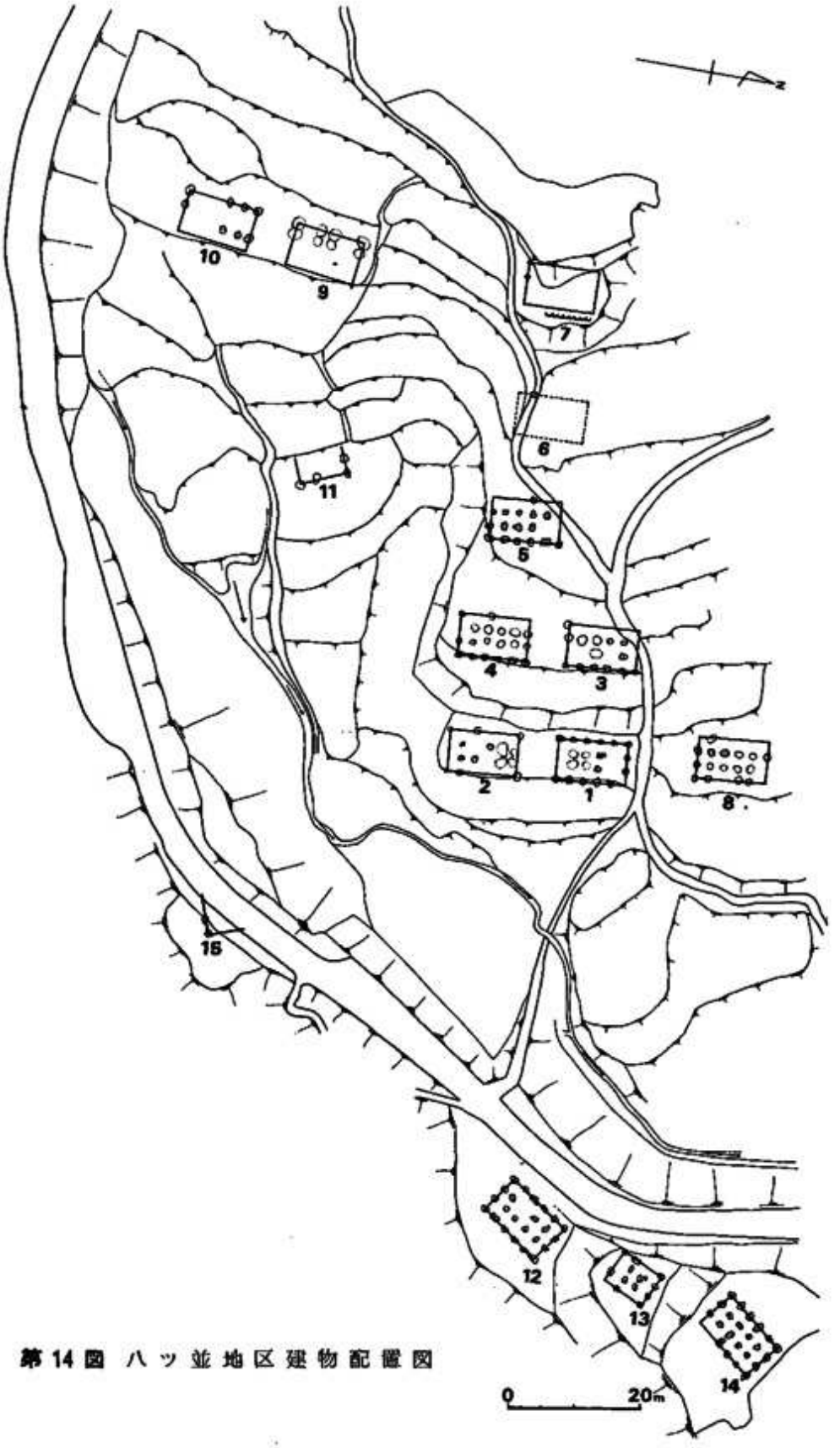
建物はすべて礎石を使用しており、原則として周囲に雨落ち溝をめぐらすものであったと推定される。これら15棟の建物は、四王寺川支流に向って東に延びる3つの小尾根端部と、その支流をはさんだ東方の小高い峯部2カ所に分散して建てられている。

建物の規模が明確なのはい棟あり（第14図建物番号1. 2. 3. 4. 5. 8. 9. 10. 12. 13. 14）、第12～14建物を除いておおむね南北に桁方向をそろえている。方向がわずかづつ異るのは山の

第12図 八　ッ　並　地　区　全　景



第 13 図　八ッ並地区 地形・発掘区実測図



第14図 八ッ並地区建物配置図

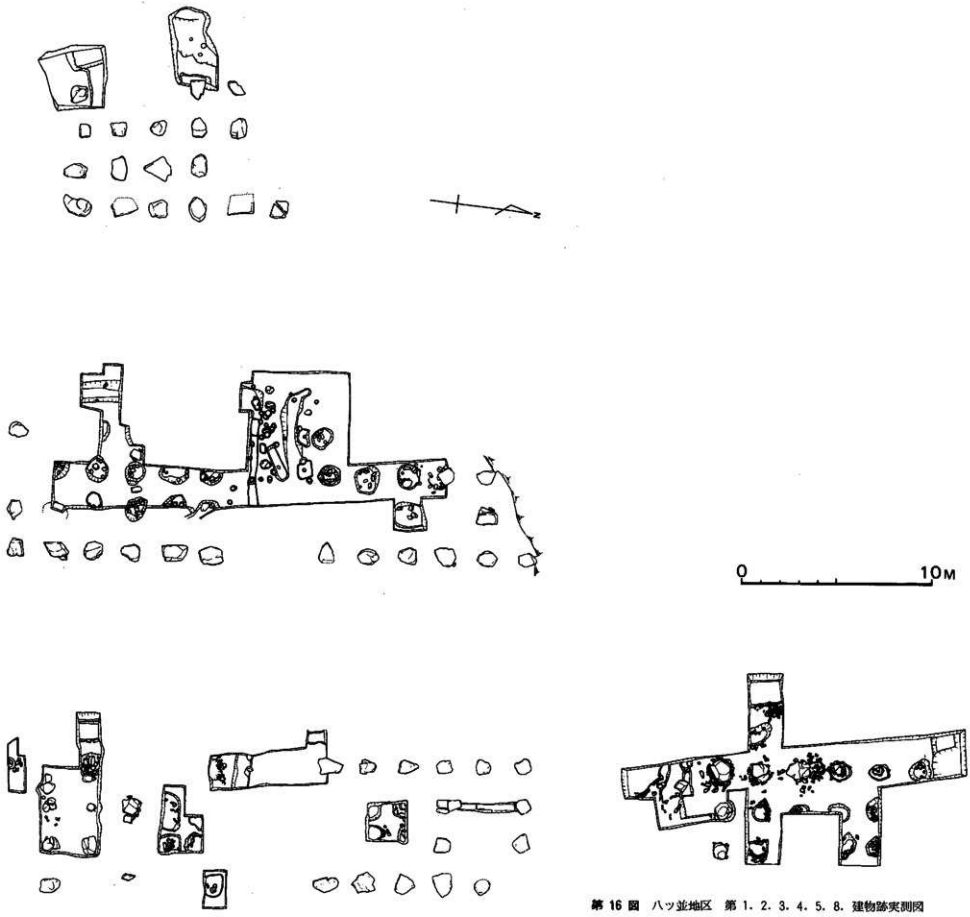
第15図 第　1　建　物

第1建物（写真は南方から）梁行3間×桁行5間、柱間寸法 210㎝、残存礎石15、雨落ち溝は明確でない。

地形に左右されたものであろう。特に第12～14建物でははっきりとうかがえる。

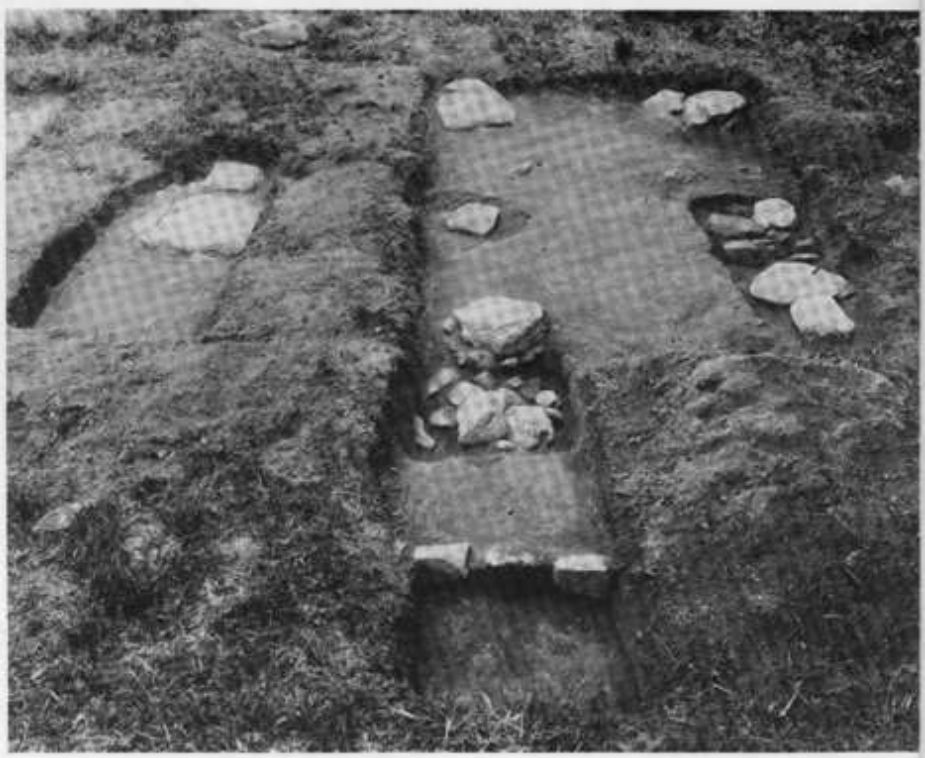
各建物については後にそれぞれ触れるが、柱間寸法等について若干概要を記しておく。柱間寸法は前述の規模のわかるものでは第13建物を除いてすべて 210㎝（7尺）で、梁行3間×桁行5間である。第14図及び第16図で一見できるように第1～5建物と第8建物は相互の位置関係が極めて規律的である。詳細は検討中であり後日の報告にゆずるが、これらの6棟の建物はおそらく7尺という基準単位を以って構成されたものであろう。第9、10建物の位置関係も同様である。

建物の基壇端は玉石を使用しているものとまったくそれがないものとがある。したがって雨落ち溝としてみるならば基壇側を玉石としたものと素掘りのものとの両者があることになり、鏡ケ池建物群のように両側に玉石を使用した痕跡は確認できなかったが、鏡ケ池地区の如き全面調査でない点若干問題が残ろう。



第 16 図　八ッ並地区　第 1. 2. 3. 4. 5. 8. 建物跡実測図

第２建物（写真は西方から）３間×５間、柱間寸法210㎝、残存礎石５、雨落ち溝は側柱位置から120㎝で幅約100㎝のものを西側で検出した。基壇側に玉石を並べている。



第３建物（写真は西方から）３間×５間、柱間寸法210㎝、残存礎石９、雨落ち溝は南側に幅 100㎝程の素掘りのものを検出したが詳細は不明。

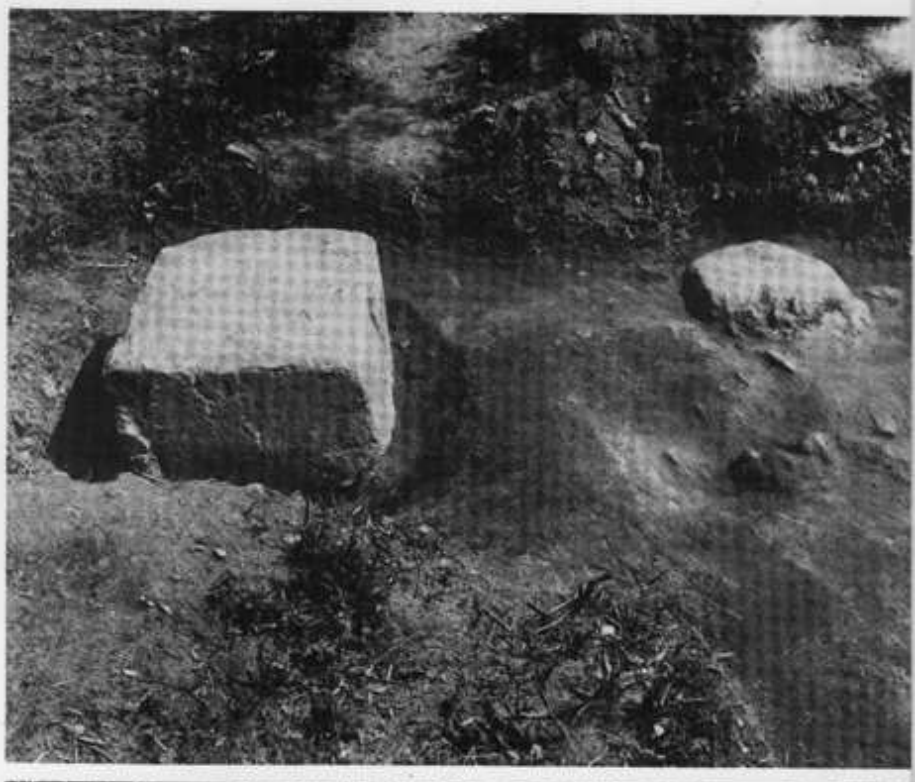
第 17 図 上 第２建物、下 第３建物

第4建物（写真は北方から）3間×5間、柱間寸法 210cm、残存礎石9、雨落ち溝は西・北とも素掘りで西側は側柱から基壇端までの距離は 150cm、溝幅100cm、北側では妻柱から基壇端までの距離は 180cm、溝幅は約30cmである。

第5建物（写真は西方から）史跡に指定されていたもので3間×5間、柱間寸法は 210cm、残存礎石は16、雨落ち溝は不明瞭である。第1～4建物と柱筋が食い違うが同方向である。

第18図 上 第4建物、下 第5建物

第６建物（写真は西方から）礎石は山道に１個だけ残存しており、周囲は抜き取り痕跡も止めない削平がされていた。この礎石は原位置を保っているが建物としての位置と様相は不明である。しかし地形状況などからも考慮して、第14図に示した位置をそれ程動くものではない。



第７建物（写真は南方から）礎石２個（写真左方のもの）が原位置を保っていた。またその東方（第６建物の側）には写真の中央やや右寄りにみられるように石積列が南北方向にみられた。残存礎石の位置が地形変換点附近であることとこの石積を基壇とし、２個の礎石のうち西方のものを西南隅の柱位置として３間×５間の柱間寸法 210㎝の建物が推定される。

第 19 図 上 第６建物、下 第７建物

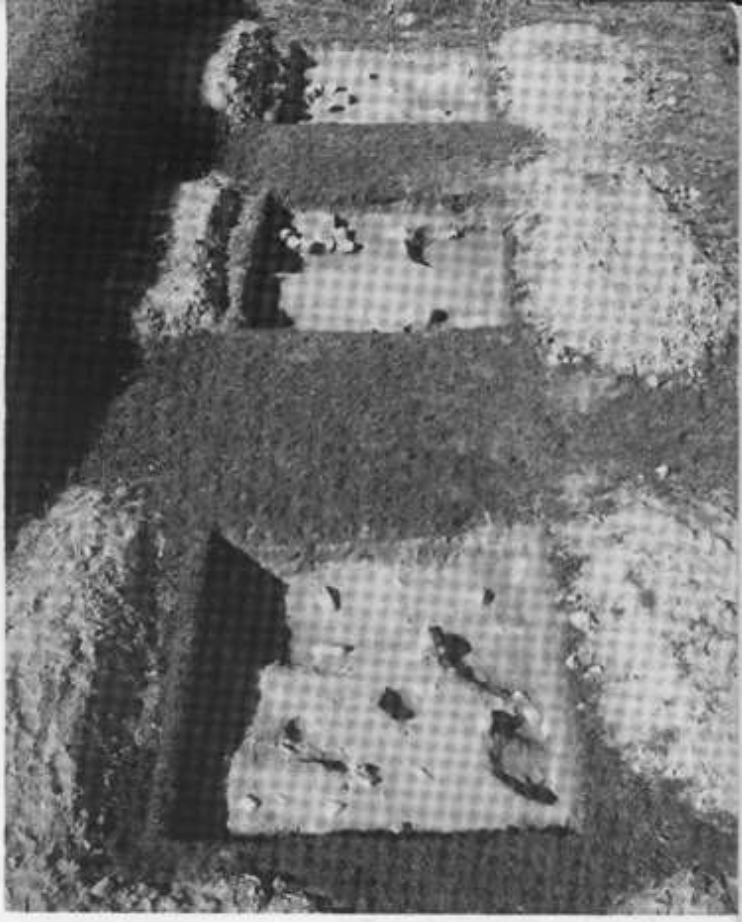
第８建物（写真は南方から）３間×５間、柱間寸法 210㎝、残存礎石５、雨落ち溝は不明である。建物の南辺部は谷に当る場所であり攪乱が激しい。そのため第１建物との間隔を第１建物と第２建物の相互距離の倍としている。

第４建物の南は谷川であるが、途中に一つの平坦面（幅約 100㎝）があり下流に向うに従い幅が広くなっている。

第 20 図　上　第８建物、下　第４建物南側平坦部

第９建物（写真は南方から）礎石はまったく残っていないが、検出した８カ所の抜取り痕と第10建物との関連から３間×５間、柱間寸法 210㎝と確認した。

第10建物（写真は北から）３間×５間、柱間寸法 210㎝、残存礎石は８、西側で玉石を基壇側に使用した幅約80㎝の雨落ち溝を検出したので建物の位置が確認できた。この雨落ち溝底部で掘立柱掘方を梁行方向の礎石延長上で検出したが、増長天鏡ケ池地区例と併せ考えてみたい。



第 21 図 上 第９建物、下 第10建物

第11建物（写真は北方から）外回りにだけ礎石とその抜取り痕を検出した。礎石は1個残存、柱間寸法は240cm（8尺）、桁方向を東西に向ける可能性がある。以上から倉庫でない可能性があり、全面調査が必要である。

南方からみた第9（向う側）、10（手前側）、11建物（右端）の遠景である。

第22図 上 第11建物、下 第10．11建物遠景

第12建物（写真は西から）3間×5間、柱間寸法 210㎝、残存礎石23。

第13建物（写真は東方から）3間×3間、柱間寸法は中央間だけ180㎝で外囲りは210㎝であり、柱間寸法と共に規模もまた当地区では特異である。残存礎石は12個ある。

第14建物（写真は南方から）3間×5間、柱間寸法は 210㎝、礎石は22個残存した。

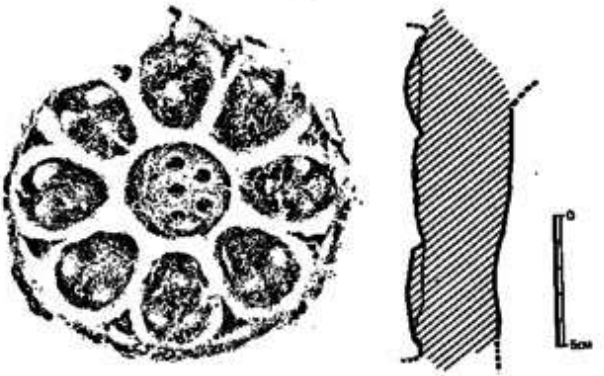
尚第15建物は少し南方に1棟だけはなれてあり、礎石を2個残すのみである。柱間寸法210㎝。

上 第12建物
第 23 図 中 第13建物
下 第14建物

(2) 遺　　物

八ッ並地区調査で出土した遺物は土師器、青磁器、瓦類である。

土師器は主に第7建物跡のピット内ないし石垣に混在して出土した。坏片10個、高台付塊片33個と黒色土器片3個である。高台付塊は器形等から2種類に分けることができる。黒色土器は内部を丁寧に篦磨きしており、器形は高台付塊に類似する。これらの土師器は大宰府政庁跡などから出土する土師器と勘案して9C末～10C頃と考えられよう。(註1)



第24図　出土古瓦拓影

瓦類は各々の建物跡から普遍的に出土した。第24図は第8建物西側から出土したもので、かって小田富士雄氏により紹介(註2)されているものに酷似している。八弁単弁瓦で中房は1＋6、外区は欠損し不明であるが、おそらく重圏縁が廻るものと思われる。同種のものが太宰府町日管寺に保管されている。この他多量の縄目文瓦が出土した。大野城跡からの出土遺物は非常に少く、又資料不足の点もあり詳細については次回に譲りたい。

註1　森田勉氏の御援助を賜った　　2　小田富士雄「古代の大宰府四王院」『九州史研究』1968

Ⅳ　結　　び

調査の結果八ッ並地区では礎石建物が少くとも15棟存在したことが確認できた。そのうち「倉庫」であろうと推定できるのは14棟（第11建物を除いた）である。

先に述べたように、本調査はごく小規模な発掘を行ったにすぎず、本文に述べた基壇の出や雨落ち溝の幅、構造等については、今後調査進展に伴い当然修正されていくべき性質のものである。また当地区での建物もまだ数を増す可能性がありそれらの調査内容を次第に高めることによってのみ正しい解釈が可能になって行くものと考えている。

巻末であるが、調査に際してお世話になった地元四王寺在住の各位に深謝する次第である。

特別史跡大野城跡　大石垣、八ッ並地区建物跡
—史跡環境整備事業に伴う発掘調査概報—
昭和51年3月31日
発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6—29
印　刷　隆文堂印刷株式会社